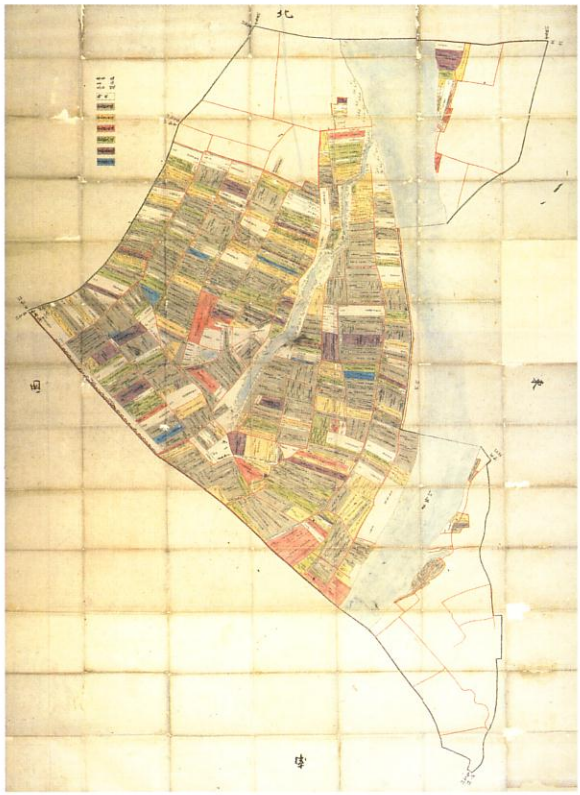
文書館だより

第26号
徳島県立文書館



新喜来村検地絵図
（江戸後期）
豊田家文書

旧吉野川が高房村付近で今切川と分流し、さらに鳴門方面に北流する左岸（北岸）に位置する板野郡新喜来村（現北島町）の検地絵図。未記入の部分はあるが正確な測量図の上に土地一筆ごとに検地内容が記述され、蔵地(藩直轄地）と給地（家臣の知行地）ごとにカラフルに色分けされている。江戸時代の村で実際どのように土地の領有や所有されていたかを知るために重要な絵図である。

目　次

学校資料の保存と活用……2
海南高校に残されていた公文書……3
学校の宝物……4
古文書の世界　父の「お咎め御免」を一心に願う「孝心」者の息子……6
文書館のあゆみ（平成17年７月～12月）……7
徳島慶應義塾と自助社……7
各種講座のご案内……8
文書館の利用案内……8

第31回資料紹介展「学校の宝物」

平成18年４月25日(火)～７月30日(日)

学校は卒業生や地域の人々が生活をしてきた〝証〟がつまった史料センターです。学校の再編・統廃合が進む今、学校に残されてきたさまざまな史料＝宝物にスポットをあてます。

文化の森子どもフェスティバル「文書館まるごと探検隊」

平成18年５月５日(金)

文書館の〝お仕事〟や徳島の歴史についてわかりやすく解説します。

第31回企画展「江戸時代阿波の交通制度」

平成18年８月１日(火)～10月29日(日)

江戸時代、阿波国内に張り巡らされていた交通網・通信網を、絵図や古文書を通して紹介します。

第32回企画展「徳島近代交通史」

平成18年10月31日(火)～平成19年１月21日(日)

大きく移り変わっていった、明治以降の徳島の交通を、地図・公文書・古文書・写真などを通して紹介します。

特別企画展「庚午事変」

平成19年１月23日(火)～４月22日(日)

近代の幕開けに起こった庚午事変は、その後の徳島に大きな影響を残しました。多くの人々に悲劇をもたらしたこの大事件を、関係者の日記や書軸などを通して振り返ります。

海南高校に残されていた公文書

松風同窓会長　小林勝美

徳島県教委は海部郡高校再編で、日和佐・海南・宍喰商業の三高校を廃止し、一高校に統合した。この決定により海南高校に残されている書類調査と目録づくりを行った。

今回の報告資料は一部ではあるが、学校にはこのような公文書が残り、生きた証言だと思い報告を試みた。

村立海部実業女学校から県立高等女学校への移管

大正十一年川東村外三村学校組合立として認可、翌年、五月六日に開校した。この創立期の薄冊資料（写真）、「秘書一号・二号・三号」（大正十五～昭和二十二年）「例規一号・二号」（大正十三～昭和十五年）の公文書。

余談だが、当時の川東村議会議事録（海南町議会蔵）には、設立承認、学校敷地の購入等々の議案書がある。

昭和三年に県立移管が決定され、女子高等教育の充実が図られ、設備、教材教具類等の備品購入が行なわれた様子を伝える記録簿や資料がある。

「海部高等女学校設置に関する資料」（昭和三～十七年）、「物品内譯簿」「物品出納簿」「御大典事業収支簿」（昭和三年）があり、「教務往復書類」「庶務往復書類」（昭和六～四十五年）が六十冊と揃い、現在の教務日誌へと続いている。一方、「海部高等女学校入試志願者心得」（昭和八～十一年）「生徒保護者心得」（昭和八年）、同窓会では「海女沿革史・創立十周年誌」（昭和八年）「創立二十周年史」（昭和十八年）、保護者は「海部郡連合婦人会」（昭和六～十二年）、他に「高等女学校長協会」（昭和三～九年）もある。特別に事務長綴「各種統計基本調査簿・近藤書紀Ⅰ・Ⅱ」（昭和八～二十四年）がある。これ等の多数の資料群は女学校教育の全体像を物語る。

「残されていた公文書」
（海部高等学校歴史館所蔵）

第二次大戦下の女学校教育と学校の実態を示す公文書

大戦の勃発と参戦、本土決戦へと戦争は激化し、教育も戦時体制へと徹底が図られ、学校・生徒・地域の混乱、そして終戦となる。学校の対応は

「恤兵寄贈品書類」（昭和十七～二十年）「学校報国隊会計書類綴」（昭和二十年）「学徒隊書類」（昭和二十年）「国庫納金に関する報告書・六冊」（昭和十九～二十五年）があり、「人事に関する書類綴」（昭和十五～二十四年）「内務職員・共済組合員證発行簿」（昭和十八～二十三年）、地域社会として「海部地方事務所往復書類」（昭和十七～二十四年）「選挙公営に関する書類」（昭和十～二十二年）等がある。そして、「連合国軍最高司令部の指令に基く書類綴」（昭和二十年）「県教育会往復書類」（昭和二十～二十二年）等々の簿冊が残されている。

戦後の学科再編・男女共学と校友会（部活動）による活性化

教育基本法の制定や学校教育の民主化とともに学制改革が断行された。

海南高校も学科再編等で四回も校名が変更され、昭和三十一年県立海南高等学校となった。学校の体制や教育課程も整い、書類も教務・庶務の上に、

「会計往復書類綴」（昭和二十一～四十一年）二十冊が保存され、現在の事務室「支出負担行為命令書関係」（平成十年度）等々の書類へと受継がれている。戦後は保健衛生や体力向上が呼ばれ、保健室の設置とともに、全校生徒の「身体検査票」（昭和二十二～三十二年）、現在の保健日誌へとつながり、保存されているが、個人情報が満載で公開は不可能な公文書である。また、「育英会書類綴」（昭和二十二～二十六年）、「定期事務監査資料調書」（昭和二十七～現在）、「学校要覧」も残存、さらに、「PTA関係書類綴・海南高校PTA」（昭和二十三～五十四年）があり、同窓会は昭和三十年「体育館建築寄付者名簿」が十三冊も残り、「創立六十周年記念関係書類」（昭和五十八年）が十冊保存されている。この年に編集された記念誌の資料が一括して校長室の木箱に保管されていたのは貴重である。一方、校友会（部活動）も活動を開始し、「校友会書類綴」（昭和二十五～三十一年）があり、中でも「野球班」は昭和三十九年全国選抜大会で全国制覇を達成し、「籠球班」は昭和四十二年インターハイでバスケットボール部全国優勝と華ばなしい偉業を打立て、県南地域の活性化に大きく貢献をした。

海南高校にも昭和二十三年から「定時制」「宍喰分校」「川上分校」等が設置され、昼間・夜間と高等教育が地域社会の中に開学され、多くの生徒達が学んだ学校として多くの書類や資料が保存されている。

今回の多数の資料は最後の校舎解体工事で、五十箱程度が発見され、先生方三名の協力のもとで目録作成（約千点）を行った。ただ、当時の教科書類が残されておらず、今後卒業生の寄贈に期待をしている。また、昭和四十六年から十年間の書類が皆無で、原因不明のまま残った。

最後に、三高校に残る公文書資料・図書類・記念品・賞状等は海部高等学校歴史館（小体育館二階）に保存・展示し、地域に存在した高校の歴史や伝統を広く伝える資料館としたい。（元文書館長）

学校資料の保存と活用
―学校教育の豊かな創造のために―

立石恵嗣

「思い出すことを大切に」

気鋭の脳科学者茂木健一郎が、ある数学者の「創造することは思い出すことに似ている」という言葉を引用しながら、「記憶は過去を振り返るだけでなく、未来に何が起こるかを予想することや、新しいものを生み出す（創造性）のはたらきとも関係している」「記憶という脳の働きがあるからこそ私たちは人間らしい生を享受することができる」と述べている。（『脳の中の人生』中央公論社）

茂木のこの指摘は、記憶や昔のことを覚えているという過去に関する脳の働きが、人間が生きることや創造性にとって重要な役割を果たしていることを最新の脳科学が裏付けたということである。

過去の出来事や歴史を学ぶことの意義については、昔から多くの歴史家や哲学者たちにより語られてきた。いわく「温故知新」、「歴史は鏡」、「歴史とは現在と過去との対話である」等々。言うまでもなく過去と関わりのない現在はあり得ない。人間や社会は歴史的存在なのである。過去は人間の営みの豊かな蓄積であり、歴史遺産から汲み上げるものは大きい。

徳島県に関する歴史資料の保存と活用を進めている文書館では、学校における様々な記録資料を貴重な文化遺産（学校の宝物）としてとらえ、これからの豊かな教育活動に生かすべく掘り起こしを行っている。

地域社会の歴史を物語る学校資料

学校に残されている記録資料を調査して驚くことは、戦前の旧制中学校や高等女学校、実業学校の教育レベルの高さである。今は埃にまみれた戦前から設置されている学校図書館蔵書の質と量には圧倒される。歴史関係だけでも名だたる和書・漢籍をはじめ、革張りの『古事類苑』や『群書類従』・『大日本史料』等々、学術研究上不可欠とされる古典籍がぎっしり、文字通りの汗牛充棟である。文学や語学、理系の図書も専門的にみても現在の大学レベルの充実ぶりである。各学校は、その土地・地域社会の繁栄を担った存在であり、最高学府としての誇りに満ちているように思われる。

また郷土関係図書は、『阿波藩民政資料』、『徳島県史』など今となっては入手困難な稀少本が散見され、地域史料の宝庫といっても過言でない。単に学校の教育活動を示すだけでなく、それぞれの時代の地域社会の有り様を反映している貴重な文化財である。

学校の記憶や記録を大切に！
記録資料の散逸防止と保存活用を図ろう！

学校における歴史資料（学校資料と呼ぶ）は、図書類だけではない。学校における教育活動の記録全般である。具体的には、公文書（学校の設立や組織の根幹に関わる法令文書、学籍簿、教務日誌など）、指導用教材（建築模型、設計図など）、記録写真、入学試験・定期考査問題、部・クラブ活動の記録、演劇台本や楽譜等々、日常の教育活動や生徒の学習記録などのすべてであり、その学校の教育活動の「証（あかし）」となるものである。

残念なことにそれらの大半は埃やカビにまみれ劣化が進んでおり、手にとって利用されることもなく放置され、廃棄寸前の状況にある。学校の統廃合により資料の散逸が進む中これらの学校資料を歴史的文化的遺産としてどのように保存し、活用していくか急がれる大きな課題である。

全国的にも評価の高い脇町高校の「芳越歴史館」のように学校資料館として保存活用することができれば理想的ではあるが、現実的には財政等難しい問題が立ちはだかっている。

まず必要なことはこれらの記録資料を、価値あるものとして認め活用していこうとする歴史意識や認識ではないだろうか。それぞれの学校において現在・未来の学校教育をより豊かに充実したものとするために、過去の歴史遺産を生かす時、現在の学校教育の諸活動に動じない軸を与え重みや深みを加えることができるだろう。

（文書館長）

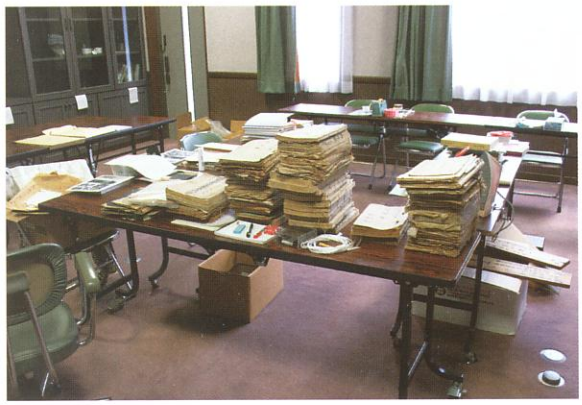
学校資料館として全国的にも評価の高い脇町高校芳越歴史館（内部）

十四年以来の校誌「芳越」など、脇町高等学校にとっての一級の歴史資料が多数含まれている。二階部分には和漢の古典や『WEBSTER INTERNATIONAL DICTIONARY』など、六千点を超える旧制中学校時代の書籍が収蔵・一部展示されている。これらは旧制中学校の教育レベルの高さを示す〝証拠〟と言える。また、美馬郡半田村（現つるぎ町）の心学講舎「根心舎」で使用された『都鄙問答』などの教科書も含まれており、脇町高校のみならず地域の教育史を語る上での貴重な資料となっている。

「芳越歴史館」に収蔵されている資料は、脇町高等学校による『脇町高校百年史』編纂事業などさまざまな形で活用されている。

富岡西高等学校

脇町高等学校と共に百十年の伝統を誇る徳島県立富岡西高等学校でも、旧制富岡中学校時代の多数の書籍や明治時代以来の公文書が図書室の書庫等に保存されていた。同校では創立百十周年に向けて、「百周年記念館」の一室が学校資料の保存・展示スペースとなることが決定している。現在数人のOBの方の手によって資料の整理作業が進められている。この作業は学校資料の整理に関するひとつのモデルケースとなるのではないだろうか。



整理作業中の公文書（富岡西高校）

辻高等学校

徳島県立辻高等学校は、前身である三好郡立農学校（明治三十四年創立）の跡地に、大正五年（一九一六）三好郡立女子実業学校として創立された。

大正九年に三好郡会は同校の高等女学校昇格を可決し（翌年に文部省が認可）、これを記念して「三好婦人図書館」が建設される。この「婦人図書館」は質量共にすぐれた蔵書を誇り、昭和二年（一九二九）に文部大臣表彰を受け、同四年には鉄筋コンクリート三階建てという当時としては破格の図書館が建設されている。この「三好婦人図書館」のすばらしさと、その建設・運営を主導した初代校長高津半造の見識の高さは、戦後の一時期辻高校で教鞭を執り、図書の整理に当たった金沢治が、同校の『五十周年記念誌』に寄せた一文にあますところなく述べられている。

「三好婦人図書館」の旧書庫はすでに取り壊されているが、蔵書の一部が辻高校の図書室に移されている。その中には、戦前の雑誌や『大阪毎日新聞縮刷版』などの貴重な資料の数々が整理・保存されている。また、同校には戦前の公文書も残されており、その中には昭和初期の入試問題などの興味深いものが含まれている。

これらの資料は、辻高校のみならず徳島県の教育史を考える上での大切な「宝物」といえる。

辻高校に残る昭和初期の入試問題

城南高等学校

徳島県立城南高等学校の歴史は、明治八年（一八七五）の名東県師範学校附属変則中学校創立に遡り、徳島県内で並ぶもののない伝統を誇っている。

同校は創立以来校舎が何回か移転している上に、昭和二十年（一九四五）七月の徳島大空襲によって校舎が灰燼に帰したこともあって、戦前の貴重な資料の多くが失われてしまっている。しかし、焼失を免れたり卒業生から贈られた資料、さらに戦後の資料等を同校は豊富に持っており、これらは創立百十周年記念事業の一環として昭和六十年（一九八五）に建設された『渦の音歴史館』に保存・一部展示されている。この中には、徳島大空襲によって焼けこげた学籍簿など、旧制中学校以来の城南高校の長い歴史を象徴するような、貴重な資料が多数含まれている。

古い書類や写真などの保存で、お困りの個人や事業所はございませんか。徳島県立文書館でお手伝いできることがあればご一報ください。

学校の宝物
～県内各高等学校に残る歴史資料～

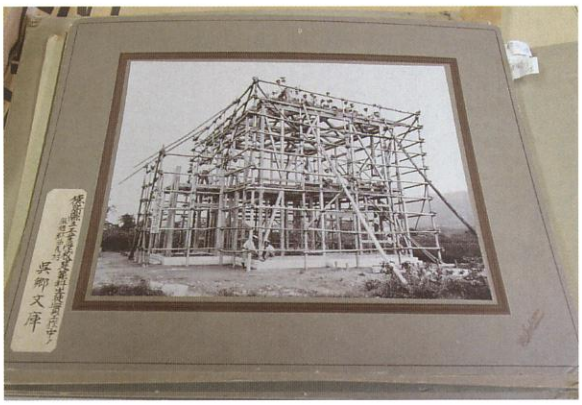
現在進められている学校の統廃合や校舎の新築・耐震補強工事によって、それぞれの学校に保存されてきたその学校―のみならず地域にとっての―貴重な歴史文化遺産である学校資料が廃棄の危機にさらされている。

本紙でも取り上げている徳島県立海南高等学校のように、いくつかの学校では学校資料の保存・活用に向けての積極的な取り組みがなされている。今回は徳島県内の高等学校に残されている学校資料＝「学校の宝物」と、その保存に向けた取り組みの一端を紹介したい。

徳島工業高等学校

徳島県立徳島工業高等学校は明治三十七年（一九〇四）に徳島県立工業学校として創立された。この度の高校再編により、徳島県立徳島東工業高等学校・徳島県立水産高等学校との統合が決まっている。「文書館だより第25号」にも少し紹介したように、同校には創立当初以来の貴重な公文書類が残されており、その一部は当館で燻蒸・整理（目録作成）を行っている。これらの公文書の他にも、同校の建築科には徳島県の教育史のみならず建築史を考える上での貴重な資料が多数残されており、ここではそのいくつかを紹介してみたい。

県立工業学校の創立と同時に設置された建築科（明治四十四年までは木工科）には、大正五年（一九一六）から昭和二十一年（一九四六）までの「工場日誌」（公務日誌）が残されている。この簿冊は戦前の建築科の教育活動を知る上での基本資料であるが、その中には第一次世界大戦時のドイツ兵捕虜が県立工業学校を訪問・技術指導した時の記録など、興味深い情報が満載されている。



県立工業学校生徒により建築中の呉郷文庫

県立工業学校は新技術の普及と生徒の教育をかねて、県内各地でさかんに委託設計や建築を行っており、その中には石原六郎が麻植郡西尾村（現吉野川市）に設立した私設図書館「呉郷文庫（ごきょうぶんこ）」も含まれている。これらの建築物に関する設計図や写真・仕様書などの資料が豊富に残されており、同校の活動を知る上での貴重な資料となっている。また、同校で実習のために製作された県内外の建築物の模型が多数残されている。その中には眉山大滝山の三重の塔など、今は失われてしまった徳島を代表する建築物も含まれており、これらも貴重な「学校の宝物」と言える。

脇町高等学校

徳島県立脇町高等学校の「芳越歴史館」は、全国的にも珍しい学校の歴史資料館として注目を集めている。脇町高校の歴史は明治二十九年（一八九六）の徳島県尋常中学校第一分校（明治三十二年に脇町中学校として独立）創立に遡り、富岡西高校と共に、徳島県下で城南高校に次ぐ歴史を誇っている。

同校には明治以来の公文書や図書が大量に残されていたが、関係者の高い見識と多大な努力の結果、昭和六十一年（一九八六）に創立九十周年記念事業の一環として「芳越歴史館」が建設された。

「芳越歴史館」は鉄筋コンクリート二階建てで、地域との調和を考えて正面に「うだつ」二基が設置されている。一階部分には明治十二年（一八七九）から同十八年まで設立されていた脇町中学校（前身校）時代、旧制中学校時代、戦後の新制高校時代の歴史資料三千点以上が収蔵され、その中の一部が展示されている。この中には、明治十二年の脇町中学校の「設置布達」、旧制脇町中学校として独立した明治三十二年以来の「教務日誌」、明治三

芳越歴史館（外観）

文書館のあゆみ

（平成17年7月～12月）

7月
1日　資料調査（神山町農村環境改善センター他）
5日　資料収集（那賀川町山田家）
6日　四国大学学生研修
9日　第5回古文書講座（初級）「江戸時代の文体に慣れる2―難船関係史料を読む―」
13日　資料調査（海部・宍喰・日和佐高校）
14日　古文書保存講座（～15日）
23日　第6回古文書講座（初級）「古文書の文字に慣れる1―蜂須賀家文書を読む―」

8月
2日　特別企画展「戦後60年のメッセージ」（～10月30日）
4日　高校図書委員研修
6日　第7回古文書講座（初級）「古文書の文字に慣れる2―蜂須賀家文書を読む―」
9日　文化の森人権啓発展（～14日）
15日　徳島地方史研究会来館（阿波学会木内家文書調査　8月11日）
19日　文書館ナトコ映画祭（～21日　ミニシアター）
20日　資料調査（小松島市地蔵寺）
24日　第8回古文書講座（初級）「古文書の内容を読みとる1―訴状を読む―」
26日　阿波人形浄瑠璃ウィーク（～28日　多目的ホール他）
31日　文化の森人権研修
資料調査（旧貞光町役場資料）
NHKとくしま歴史講座受講生来館・見学

9月
3日　第9回古文書講座（初級）「古文書の内容を読みとる2―訴状を読む―」
4日　特別企画展展示解説
5日　国立公文書館短期研修（～9日）
10日　徳島の古文書を読む会運営委員会
資料調査員会議
13日　全国歴史資料保存利用機関連絡協議会資料保存委員会研修会（兵庫県民会館）
16日　第2回全国歴史資料保存利用機関連絡協議会役員会（東京都公文書館）
17日　第10回古文書講座（初級）「書簡を読む」・閉講式
資料調査（国会図書館）
27日　徳島の古文書を読む会臨地見学会準備会
資料調査（徳島市木村家）
28日　文書館だより第25号発行

10月
1日　第1回古文書講座（中級）　徳野隆氏「明治三年の村方騒動」
2日　特別企画展展示解説
8日　第2回古文書講座（中級）　名倉佳之氏「阿波国西部における心学の史料」
15日　第3回古文書講座（中級）　松本博氏「『御用録』にみる〝士族反乱〟など」
16日　資料調査・収集（藍住町・犬伏家）
20日　第36回全国都道府県史協議会（～21日　宇都宮市）
22日　文化の森十五周年記念展（～11月27日）

11月
23日　第4回古文書講座（中級）　阿部聡美氏「『加登屋日記』に見る挿花奉納」
28日　第1回歴史講座　林啓介氏「よみがえる『第九の里』」
29日　資料調査（城南高校）
第5回古文書講座（中級）　金原祐樹氏「古文書に見る庄屋の交替」
1日　第29回資料紹介展「写真で見る失われた徳島の風景　城下町徳島」（～1月29日）
4日　県教委事務局幹部職員人権問題研修会（婦人会館）
9日　全国歴史資料保存利用機関連絡協議会全国大会（～11日　福井県国際交流会館他）
16日　徳島の古文書を読む会臨地見学会（洲本市）
23日　資料紹介展展示解説
27日　第2回歴史講座　宮崎淳氏「眉山の文学誌」
28日　公文書管理・保存講座
30日　資料収集（日和佐高校）

12月
1日　中国四国地区文書館等職員連絡会議（～2日　県庁）
6日　文化の森人権啓発展（～11日）
10日　徳島の古文書を読む会運営委員会
18日　第3回歴史講座　逢坂俊男氏「自助社と自由民権運動」（大雪のため期日変更）
19日　文化の森消防避難訓練
20日　県教委事務局職員人権問題研修会（県庁）
22日　行政資料収集（県庁等）
28日　年末年始休館（～1月4日）

徳島慶應義塾と自助社

徳野　隆

福沢諭吉が創立した慶應義塾の分校が、ごく短期間ながら徳島に存在していたことを、どれほどの方がご存じでしょうか。

福沢の名声と共に入塾希望者が増加していた慶應義塾では、地方出身者の修学の便をはかるために、明治六年（一八七三）から翌年にかけて大阪と京都に分校を設立します。明治八年七月、閉鎖されることになった大阪慶應義塾が徳島に移されることになり、名東郡富田浦三番地に徳島慶應義塾が設立されます。大阪慶應義塾最後の校長で、『経国美談』の著者として知られる矢野龍渓（文雄）が徳島慶應義塾の校長となります。確認可能な塾生は、大阪から移ってきた三人を含めて五十一名。学科は「英書」「算術」「訳書」の三科目。入社金は二十五銭で、二円七十五銭を納入すれば東京三田の本塾に自由に移ることができました。

この慶應義塾誘致の中核となったのが、明治七年に徳島藩旧士族を中心に結成された自由民権結社の自助社でした。

徳島慶應義塾の記念碑

この自助社は高知の立志社などと呼応しながら民権思想の普及に努めると共に、「八ヶ村堰問題」などで県当局と激しく対立していました。これらの運動を進める中で、次代を担う若い世代の育成の必要性を感じた自助社が、旧藩主蜂須賀茂韶の協力を受けながら、慶應義塾の誘致を福沢に働きかけたと言われています。

このようにしてスタートを切った徳島慶應義塾を直撃したのが、いわゆる「通論書事件」でした。政府が明治八年四月に出した漸次立憲政体樹立の詔勅の解説書として、自助社は「通論書」を印刷・配布します。その中の「天子様ハ則チ国王ト云フ御役人デ諸役人ノ総押ヘ」などの文言を問題視した名東県は、同年九月に「通論書」の回収を命じます。次いで井上高格（後の初代徳島市長）ら幹部が逮捕・起訴され、その多くが禁獄などの刑に処せられます。この「通論書事件」によって自助社は大打撃を受け、明治十一年に解散を余儀なくされます。支持母体とも言うべき自助社の衰退は徳島慶應義塾の経営に打撃を与え、明治九年十一月閉塾のやむなきにいたりました。

徳島慶應義塾の位置については以前から諸説がありましたが、蜂須賀家東御殿（現・徳島市万代町三のプリンスホテル付近）であることがほぼ特定され、平成十三年（二〇〇一）に記念碑が建立されています。

（古文書係長）

古文書の世界

―― 与頭庄屋　谷幸三郎記録（御用控）より ――

父の「お咎め御免」を一心に願う「孝心」者の息子

庄屋が詳細を郡代に報告、藩の処断を動かす

松本　博

天保十三（一八四二）年、徳島藩で「上郡一揆」と呼ばれる百姓一揆が起こった。阿波北方の貧しい農民数万人が、年貢の減免や商品作物の自由販売・流通の自由化などを要求して広範なひろがりをみせた大規模な一揆であった。

各地に一揆が波及するなか、美馬郡重清村の騒動で首謀者の一人として召し捕えられ、徳島城下の牢につながれていた与市という男を救い出そうとした「孝心」者の息子がいた。幼年の惣領・市左衛門である。彼はお上の「お咎め御免」を願って神仏への祈願を昼夜を問わず重ねた。その「孝心」が藩の処断のありようを動かし、ついに父との対面が許されただけでなく、与市は永牢にもならず減刑となり、南の出羽島への流罪となったと伝えられている（『美馬町史』参照）。

その「孝心奇特者」の市左衛門の行状を、西端山の与頭庄屋・谷幸三郎は、当時の郡代・高木真蔵へ届けられるよう書き留めた。ここに紹介する谷家文書（当館所蔵・タニケ〇〇四一九）がそれである。

江戸時代には、寛政年間以来、全国的に孝行・奇特者の調査が行われ各地で「孝子伝」「孝義録」としてまとめられている。徳島藩にも『阿淡孝子伝』一〇冊がある。封建道徳として儒教倫理がとくに重んじられたこの時代、幼い市左衛門の「孝心」をどう裁くかは封建領主の威信にかかわるものであったであろう。さて、庄屋・谷幸三郎はどんなことばで市左衛門の「孝心」を伝えようとしているであろうか。先に解読文を掲げ、後に部分的読み下しをしてみよう。

【解読文】

真蔵様御手崎へ指上候横切扣

申　上　覚

重清村当春之一件ニ付御召捕被仰付候者共之内／猿坂平尾名御蔵百姓与市惣領市左衛門義未幼年／者ニ御座候処別而孝心奇特者ニ付右運合有姿先達而／奉申上御座候　然所右申上候以来之心得方彼処へ入込ミ／承合申上候様被仰渡奉畏重々承合候運左ニ奉申上候

一　当三月二十二日申上候以来も朝夕神前へ燈明洗米等／相備ヱ仏壇江も同断燈明線香ヲ備ヱ何卒親与市／御咎御免被仰付早々帰宅相調候様清心気力ヲ尽シ／心願仕相祈り居候趣ニ相聞申候

一　彼処氏神ヱも其以来毎朝無怠り裸足ニ而参詣仕／居申由ニ御座候

一　讃州金毘羅大権現へも親与市帰宅之立願相懸ヶ／月参仕先月中旬迄三ヶ度参詣ニ罷越候趣　尤極々／困窮之手元尚更当春以来之義ニ而稼方仕者無御座／老人女子供迄之事故別而難渋ニ相迫り飯物抔も麦熟／穂迄取繋相調不申近縁内隣家等ニ而借合相凌居申／懸り金毘羅参詣ニ罷越砌ハ両三度之支度弁当／草鞋等用意仕罷越宿附も木賃ニ而止宿仕五七分位ニ而／事足り候様相仕成右之仕合往返道筋両日之支度／菜茶代二三分程壱ケ度参詣ニ罷出候雑費都合／壱銭目位ニ而相済候趣乍併孝心者故老母へ少々之／飴調ヱ帰り候由　将又三好郡太刀野山奥讃州御境目／大川権現ヱ当春以来三四ケ度参詣ニ罷越候趣右両社へ／与市帰宅相叶候迄月参之心願仕居申処去月十八日／市左衛門弟病死仕其以来ハ仏参而已ニ而神参ハ不仕趣ニ御座候

一　此砌弟之忌明ニも相至り候ニ付重清村惣氏神八幡宮／并岩倉村新四国右両処へ壱日更りニ風雨抔も不相厭／無間断参詣ニ罷越申ニ付老母并母より雨天等之節ハ／罷越不申共宅ニ而拝シ候様申聞候而も市左衛門義雨中等ヲ／相厭候而ハ神仏御納受加護も薄キ道理ト申壱日も／無滞由ニ相聞申候

一　右市左衛門義頃日御山下江罷越候処御慈悲ヲ以父子之／対面御免被仰付重々難有相心得罷帰候由　尤帰宅之上／与市御咎ヲ相嘆キ食事も不仕壱両日臥込ミ候由ニ御座候

一　市左衛門義老母母親へ孝行貞心相尽シ老母抔之悔ヲ／色々申宥メ至極志厚者之由ニ御座候

一　右孝心相感候而哉名内之者共市左衛門作場手伝ニ罷越／作付取あげ等聊相後レ不申由ニ御座候

一　市左衛門義孝心今以少シも相怠りなく神仏へ心願仕／相祈り居申趣右之仕合当郡中村々江右志シ相聞へ／承給候者何れも感心仕居申候

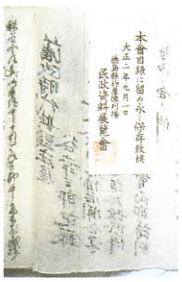
右之通承給候運無指扣奉申上候　可然様被仰上可被下候

谷　幸三郎

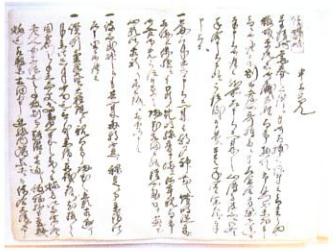
寅五月廿四日

村田　芳郎様へ
高井　与三兵衛様へ
安達　貞之進様へ
田野　祐太郎様へ

右者高木新蔵より被仰渡ニ付聞合横切仕五月廿五日朝郷司氏へ／相頼徳嶋へ指出申候



大正3年発刊『阿波藩民政資料』▶
編さん時の確認証（表紙裏面に貼付）



▲「藩政時代與頭庄屋・谷幸三郎記録」の内、
重清村與市伜・市左衛門孝心奇特取調之件（部分）

【読み下し文（部分）】

申し上げる覚え

重清村当春の一件につき　お召し捕え仰せつけられ候者どもの内　猿坂平尾名御蔵百姓与市惣領市左衛門義　いまだ幼年者に御座候ところ　別けて孝心奇特者につき右運び合い有り姿（中略）左に申し上げたてまつり候

一　当三月二十二日申し上げ候以来も　朝夕神前へ燈明洗米などあい備え　仏壇へも同断燈明線香を備え　何とぞ親与市お咎めご免仰せつけられ　早々帰宅あいととのえ候よう清心気力を尽し心願つかまつり　あい祈りおり候趣にあい聞え申し候

一　彼のところ氏神へも　それ以来毎朝怠りなく裸足にて参詣つかまつりおり申す由に御座候

一　讃州金毘羅大権現へも　親与市帰宅の立願あい懸け月参りつかまつり　先月中旬まで三か度参詣にまかり越し候（中略）孝心者ゆえ　老母へ少々の飴調え帰り候由　はたまた三好郡太刀野山奥讃州御境目大川権現へ当春以来三四か度参詣にまかり越し候趣　右両社へ与市帰宅あい叶い候まで月参の心願つかまつりおり申す（中略）

一　重清村惣氏神八幡宮ならびに岩倉村新四国　右両処へ壱日がわりに風雨なども　あいいとわず　間断なく参詣にまかり越し申すにつき　老母ならびに母より雨天などの節はまかり越し申さずとも　宅にて拝し候よう申し聞け候ても　市左衛門義雨中などをあいいとい候ては神仏ご納受加護も薄き道理と申し　壱日も滞りなき由にあい聞え申し候（中略）

一　市左衛門義老母母親へ孝行貞心あい尽し　老母などの悔みを色々申し宥（なだ）め至極志厚きものの由に御座候（中略）

一　市左衛門義孝心今以って少しもあい怠りなく　神仏へ心願つかまつりあい祈りおり申す趣　右の仕合せ当郡中村々へ　右志あい聞え承け給り候者何れも感心つかまつりおり申し候（後略）

（主任専門員）

◆◇各種講座のご案内◆◇

二コース制の古文書講座

初級と中級の二コース制を採用し、より充実したものにしています。場所は当館講座室です。時間は午後二時から午後四時まで。

●初級コース

このコースは、文語体の読み方・くずし字辞典の引き方・文字の読み方・文意の取り方をはじめとして古文書で使用する文字の基礎をじっくりと確実に学習していただくコースです。

◇**講座定員**　四十名程度
◇**申込締切**　四月二十一日（金）
◇**講座日程**　5／6・20、6／3・17（隔週土曜日）7／1・15、29、8／19、9／2・16の十回。

●中級コース

募集は初級コースとは別にし、初級コース修了者及びある程度古文書が読める方を対象とします。県下のさまざまな古文書を教材として学習していただきます。

◇**講座定員**　四十名程度
◇**申込締切**　九月十五日（金）
◇**講座日程**　9／30、10／7・14・21（毎週土曜日）28の五回。

【応募要領】

受講を希望される方は、往復ハガキに①郵便番号　②住所　③氏名　④電話番号と、返信用に、ご自分の住所・氏名をご記入のうえ、徳島県立文書館古文書講座係までお申し込みください。なお、希望者多数の場合は、抽選とさせていただきます。

古文書保存講座

記録遺産としての古文書の保存や活用を図るため、史料管理の理論と実際について学び、古文書の修復や補修の実習をしていただく講座です。

◇**講座定員**　二十五名程度
◇**講座日程**　未定（決定し次第に広報します）

【応募要領】

受講を希望される方は、所定の申込用紙に必要事項をご記入のうえ、徳島県立文書館古文書保存講座係までお申し込み下さい。なお、希望者多数の場合は、抽選とさせていただきます。

※すべて無料です。

詳しくは徳島県立文書館古文書係までご連絡ください。

文書館の利用案内

利用方法

○閲覧室の検索用端末機で必要な資料を検索し、閲覧票に必要事項を記入して、受付に提出してください。
○閲覧室の書架に配置された行政資料等は、自由に閲覧できます。
○資料の複写や出版物等への掲載は、受付へ申し込んで所定の手続きをしてください。
○複写サービスは実費をいただきます。
○資料の館外貸し出しは行いません。

開館時間

○午前九時三十分～午後五時

休館日

○毎週月曜日（祝祭日の場合は翌日）
○毎月第三木曜日
○年末年始
※平成十八年八月十四日は開館します。
※資料整理・燻蒸のため必要に応じて臨時休館することがあります。

交通のご案内

◇ＪＲ徳島駅から
徳島市営バス利用（約二十五分）
◇ＪＲ牟岐線文化の森駅下車徒歩
約三十五分

ホームページアドレス　http://www.archiv.tokushima-ec.ed.jp（徳島県立文書館）

文書館だより　第26号
平成十八年三月二十八日発行
編集兼発行　徳島県立文書館
〒七七〇―八〇七〇
徳島市八万町向寺山
文化の森総合公園内
TEL（〇八八）六六八―三七〇〇
印刷　グランド印刷株式会社

この印刷物は再生紙を使用しています